

1 「結びと絆の小農連合」目指す農業法人

地域の安定的持続を目指して

(農)おくがの村は、日本で最初の集落営農型の農事組合法人じゃが、年間販売額は1000万円規模とけっして大きくない。しかし、ずっと無借金で健全経営が続いてる。この「結びと絆」というのが大事なところじゃ。わかるか？

今は集落営農も、「農地集積しろ」だの「金儲けしろ」だの言われとるが、もともと集落営農組織にとって一番大事なものは、集落を維持することじゃろ？

ここはもともと、津和野町といっても、小京都と呼ばれる市街地から車で30分以上走った場所にある。林野率約9割、地区の農地面積約27ha、戸数約20戸。「奥ヶ野」というだけあって津和野町の奥の奥で、まあ典型的な中山間地の小さな集落じゃ。

そんな中山間地じゃから、「おくがの流」の組織運営理念は、「個人と法人の共存」「規模拡大より安定的継続」「結びと絆の小農連合」。規模拡大で農地を集積した結果、集落からひとがいなくなったり、無理に投資して倒産したりしたら、本末転倒と思うとる。



おくがの（奥ヶ野）の水田と里山風景

人間、食べ物がなければ生きていけない。中山間地は、生産効率は悪くても、自給自足を主体に面白く生きていける場所じゃ。年をとつても健康で楽しく農業し、最後は「ピン・ピン・コロリ（PPK）」。そうやって次の世代に引き継いでいくのが、集落営農の一番大事な役割じゃけえのお。

しかも、この小さな山あいの集落に、インターンでやってきて定住する若者もおつて、今も高校生以下の子どもが10人以上おる。それこそ、「おくがの流」の一番の成果じゃとワシは自負しとる。

そういうワシも、若い頃は規模拡大を夢見とつた。人が里から出て行くと、自分に農地が集まると喜んでいた。1980年代、「おくがの村」を設立する以前は、そうやって農地を集

め、請負耕作で10 ha規模はやっとったかなあ。

それがどうしてこんな考え方になったのか？ まあ酒でも呑みながらゆっくり話そ

うか。お前も呑め！

解説

「おくがの村」は、1987年8月27日の設立総会を経て、9月8日に設立登記された。

創立当初は、代表理事の糸賀氏を含め役員5名、組合員7名の計12名で構成し、出資金は320万円。「豊かな農業を求め、組合員一丸となり活力ある里づくりをする」ことをスローガンに、設立当初から、専従職員は置かず、組合員の協働で運営するスタイルを取ってきた。

設立当初は農業機械の貸し出し・稲作や畜産粗飼料の作業受託、ライスセンターを中心に200万円規模の事業でスタート。その後、集団転作団地でスイートコーン、カボチャ、ピーマン、サツマイモ、メロン、ホウレンソウ……と、さまざまな品目を試験導入しながら複合経営を模索。現在は、キャベツ、栗などを導入している。

2021年度の収益は911万円。構成員は、理事5名、組合員19名と計24名に増加している。ただし、創立当初の役員・組合員は、高齢化の中で5名となり、Iターン者



奥ヶ野地区に伝わる伝統芸能「中山田植え囃子」。
保存継承活動が展開された

を含めた新組合員が登場したことで、運営を支えている。

ちなみに、2022年度事業計画は、「きれいで美しいおくがの村作り」「元気で働ける、身体作り」「中山間地で最先端の圃場整備完成まであとわずか」「おくがの村の子どもの見守り。自然と戯れ、感性の持てる子をめざして」「研修・定住への取組み トレーラーハウスの利用と定住者の支援」などとなっており、「農業」だけでなく「里づくり」を指す同法人の姿勢は一貫して変わっていない。近年は、未来を担う子どもや関係人口の確保という「人」づくりも新たな課題として取り組んでいる。

この「おくがの村」設立から現在まで、一貫して代表理事を担ってきたのが、この本の語り部・糸賀盛人氏だ。まずは、糸賀氏個人の農業とのかかわりから話を始めたい。